

《国内展望》

## 礼儀知らず、非礼、あげくに不敬！ 日本を「破廉恥国家」に導く野田政権を糺す

(2012年3月17日)

東日本大震災一周年追悼式典で信じられない非礼があった。昨年の大震災に対して世界最大規模の200億円超という義捐金を戴いた台湾を無視、冷遇したのだ。その後の答弁を通して、野田内閣が意図的に台湾に礼を失したことが明らかになってきている。しかも追悼式典当日、

### 非常識きわまる「台湾冷遇」

東日本大震災に対し200億円を超える義捐金を寄せてこられた台湾のことは、日本人全員がしっかりと心の奥底に受け止め、感謝の念を忘れることはない。昨年の大震災に対し、日本は全世界93の国・地域から総額175億円の義捐金を戴いたが、これとは別に、台湾からは単独で200億円超を寄せられている。本紙が細かく解説する必要など不要。誰もが台湾の皆さまに感謝し、いまでも胸にこみ上げる熱い感動を覚えている。その恩義ある台湾の代表に、追悼式典で非礼があったことを、まず台湾の皆さまにお詫びしたい。

誠に失礼を致し、申し訳ありませんでした。心よりお詫び申し上げます。

野田首相以下政権幹部は天皇陛下に不敬を働き、マスコミまで一体となって陛下のお言葉を割愛した疑いまで浮上している。タヌキ顔の野田首相以下政権幹部をこのまま放置しておくわけにはいかない！

台湾を無視、冷遇したという報道に接したとき、私自身、体が震え顔が真っ赤になった。怒りと、そして恥ずかしさからだ。日本政府の非常識ぶりは最近とみに感じていたが、まさかこれほど礼を失する事態を引き起こすとは思ってなかった。

追悼式は3月11日午後から東京の国立劇場で行われた。ここには160の国や国際機関代表が出席し、代表者には会場1階の来賓席が用意され、順次名前を読み上げられて花を供える「指名献花」が行われた。だが台湾代表の羅坤燦（らこんさん）氏には来賓席が与えられず、指名献花もできなかった。羅氏は2階の一般席に座らされ、一般参加者として献花したという。

台湾の陳冲行政院長は、中華民国代表に外交団として献花する機会が与えられなかったことに対し「非常に遺憾だ」と語り、さらに「台湾の支援は『感謝されたい』という気持ちではなく真のおもいやりに基づいた行動だ」との考えを述べたうえで、「台日関係は一本の花束などで表わせるものではない」と、指名献花できなかったことで日本と台湾の関係が変わるものではないことを表明している。

### 支離滅裂な官房長官答弁

昭和47年（1972年）の日中国交回復以来、日本政府は台湾を「国」と認めない立場を取り続けてきている。正式には国家と認めないが、日本国民の誰もが台湾は中国とは違う地域であることは承知している。昨年の311大震災で義捐金に限ったものではなく、台湾の方々から熱い友情を贈られたことを日本人の誰もがわかっている。

日本にとって「特別な国」である台湾だが、残念ながら大使館はない。その大使館に相当するものが台北駐日経済文化代表処であり、羅坤燦氏は副代表として日本と台湾の交流に尽力をしている著名人で、各地に現れては日台の橋渡し役をこなしておられる。そんな羅氏を「国代表」とできないまでも、なぜ「機関代表」として来賓席にお招きし、指名献花をお願いできなかったのか。

ちなみに日本が「国」として承認していないパレスチナ代表は、今回、「例外的」に国の代表とされ、来賓席に招待されて指名献花を行っている。パレスチナには

台湾行政院長の言葉にもなお温かみを感じるとともに、人としての当然の礼儀すら失する日本政府に非常な憤りを感じる。いや憤りなどというナマ優しい言葉では表せない。憤懣やるかたなし、野田首相以下関係者が目の前に現れたら、渾身の力で横っ面を引っ叩いてやりたいところだ。

できたが、台湾にはできなかった。いったい、なぜなのか。

これについて翌12日、野田首相は「台湾の皆さまに温かい支援をいただいた。その気持ちを傷つけるようなことがあったら本当に申し訳ない。深く反省したい」と陳謝。直後に藤村官房長官は「十分にマネジメントできていなかったことについてはおわびしたい」と語っていた。

ところがこの藤村官房長官発言が二転する。13日の朝には、「外交団という仕切りの中で整理され、外務省と内閣府で式典のやり方を十分調整した」ことを明らかにしたうえで、「台湾に対する対応に問題はなかった」との認識を述べたのだ。前日にはおわびしておいて、翌朝には豹変である。

藤村官房長官の説明によると、台湾代表の取り扱いについて、「外務省と内閣府で調整」し、台湾を来賓から外す決定をしたということである。さらにこの決定について内閣官房長官は「対応に問題はない」と認識しているということである。

とんでもない話だ。本気で横っ面を引っ叩きたくなってきた。

こちらの怒りが伝わったわけではないだろうが、藤村官房長官発言は14日に再度変わる。前日(13日)の発言を「撤回」して、「事務的に問題はなかったが、もう少し配慮があつてしかるべきだった。新聞報道は発言の一部で私の言ったこととちよつと違う。配慮が足りなかった点に

### 天皇に対する非礼な振る舞い

野田政権の非常識、礼儀知らずは、これに終わったわけではない。

11日に国立劇場で催された追悼式典に天皇皇后両陛下がご入場、ご退場される時に「起立」が行われなかったことだ。場内アナウンスはわざわざ「着席のまま」と放送している。

陛下が大相撲の観戦にお出でになられるときでも客席全員が起立することは常識。じっさいは世界中のどこに出かけても、天皇陛下をお迎えする際には全員が起立する。天皇陛下に限らず、外国の元首、大統領、国賓が来場の際には起立するのが当然の礼儀作法であり、世界の常識である。法律で決まっていることではない。日本人として当然の話である。

天皇陛下は心臓冠動脈バイパス手術をお受けになり、退院後も左胸に胸水が溜まるなど万全の状態にはほど遠かった。それでも陛下自ら、どうしても大震災1周年追悼式典に出席されると強くご希望され、時間を20分間に短縮されて出かけられた。ご高齢、ご病氣上がりの陛下をお出迎えするのに起立しなかった理由は

ついてはおわびしたい」と陳謝している。しかしこの陳謝も、決して筋が通った陳謝ではない。相変わらず羅氏を来賓席に招待したのではなく一般席に案内したことは「何か問題があったということではない」というのだ。いったい藤村官房長官の「配慮が足りなかった点」とは何を意味するのか、さっぱりわからない。

いったい何か。これについても藤村官房長官は「事務方が詰めたもの」と責任を事務方に投げている。しかし従来起立していたものを変更した裏には、民主党政権の要望が反映されたと考えて間違いないだろう。

野田政権は意図的に天皇陛下に対する国民の尊敬の念を封印した。追悼式典会場に入場される際、天皇陛下のお顔が厳しいものだった理由は、そこにあったのかもしれない。迎える野田首相の顔もまた非常に強張っていて、まるで雌雄を決する対決直前の二人のような雰囲気があった。

政府主催の追悼式典に対する疑念は、他にもある。天皇陛下のお言葉の一部が、NHKや一部民報のニュースで割愛されたことだ。

お言葉は短いものではなかったから、たしかに全部を報道することは難しいかもしれない。しかし割愛された部分は非常に重要なお言葉だった。

割愛された陛下のお言葉は、以下のものだった。

「原子力発電所の事故が発生したことにより、危険な区域に住む人々は住み慣れた、そして生活の場としていた地域から離れざるを得なくなりました。再びそこに安全に住むためには放射能の問題を克服しなければならないという困難な問題が起こっています」

ネット情報の中には、この文言を巡って天皇陛下と野田政権との間に激しいやりとりがあったと語っているものもある。そんなやりとりが仮にあったとしても、ネット情報に真実の情報が漏れることなどない。根拠のない噂話ではあるが、陛下のお言葉が事前に首相サイドに伝わっていたことはたしかで、「再びそこに安全に住むためには放射能の問題を克服しなければならないという困難な問題が起こっています」というお言葉に拒絶反応があっても不思議ではない。

そうした噂話はともかく、天皇陛下の最も重要なお言葉を割愛したNHKやテ

レビ朝日には大問題が残る。だがそんな問題より、台湾に対する非礼、陛下に対する不敬は、野田首相の下で意図的に、確信犯的に行われたものであることは間違いない。

菅直人首相時代に、国民の多くは「菅以外であれば誰でもいい」と口にしたものだった。しかし善人面を下げ当たり障りのない言葉を口にする野田佳彦こそ、日本を破廉恥な墮落国家に導く最悪の存在であることが明らかとなった。

野田打倒の狼煙をいま上げなければ、間違いなく将来に禍根を残す。天皇陛下にむけた非礼、中華民国台湾の皆様に対する非礼、台湾に関しては特使を派遣して謝罪せよ。心ある日本人は、台湾の方々による東日本大震災の被災者に対する温かい善意を踏みにじった野田政権らの無礼を未来永劫断じて許さないであろう。関係者は心して置くがよい。■